

緑豊かな札幌の基礎を築いた

宮部金吾

北大植物園の生みの親で、札幌市名誉市民の第一号となった植物学者、宮部金吾について紹介します。

万延元年（一八六二年）に江戸で生まれた宮部金吾は、父と親しかつた松浦武四郎の著作を通じて北海道の植物に興味を持ち、明治十年（一八七七年）に札幌農学校に入学しました。同期の内村鑑三や新渡戸稲造とは、終生親交を続けました。

農学校卒業後は東京帝大に学び、十六年（一八八三年）に農学校の助教授として着任し、附属植物園を設計・造営しました（現在の植物園の原形として十九年に完成）。

また、十九年から二十二年までは米国ハーバード大学に留学しましたが、当時学問的に未知の地域であった千島・樺太の植物を採集分類した「千島植物誌」を発行して世界的に知られるようになりました。

帰国後、宮部は札幌農学校の教授として学生の指

導にあたり、昭和二十六年に九十一歳の生涯を閉じるまで、植物学の權威として、学術・文化の発展に尽くしました。

この間、初代の植物園長就任や「北海道主要樹木図譜」など学術的に価値の高い著書を数多く著したり、遠友夜学校の代表を務めたり、昭和二十一年には道民初の文化勲章を受賞しましたが、これらの偉業は平成三年に植物園内に設けられた宮部金吾記念館で知ることができます。

また、市は昭和二十四年、宮部に名誉市民の称号を授与しました。これは、植物園が市民の憩いの場として今なお愛されていることはもちろん、円山原始林の保護や美しい街路樹の育成など、多くの功績をたたえたものです。さらに、桑園の「博士村」にあった住居跡地（北六西一三）を整備し、宮部記念緑地として公開しています。



北大植物園内の「宮部金吾記念館」

（平成六年九月号・第十四回）